LIGHT HOUSE
ライトハウス
〒152-0035 東京都目黒区自由が丘 1-16-13
TEL 03-3717-2711　FAX 03-3717-2721
http://www.lighthouse-jiyugaoka.jp　e-mail gospel@lighthouse-jiyugaoka.jp
郵便振替口座　00120-6-170857　みずほ銀行 渋谷支店 普通 2382850（ライトハウス）

CFI ニュースレター C2022-11 「灯芯を消さず」

[今月の聖書]

私の支持するわがしもべ、私の喜ぶわが選び人を見よ。私は我が霊を彼に与えた。彼は諸々の国びとに道を示す。
彼は叫ぶことなく、声を上げることなく、その声をちまたに聞こえさせず、また傷ついた葦を折ることなく、ほの暗い灯芯を消すことなく、真実をもって道を示す。彼は衰えず、落胆せず、ついに道を地に確立する。海沿いの国々はその教えを待ち望む。(イザヤ 42: 1-4)
彼が正義に勝ちを得させる時まで、いためられた葦を折ることがなく、煙っている灯芯を消すこともない。異邦人は彼の名に望みを置くであろう。(マタイ 12: 20、21)
あなた方の神は言われる、「慰めよ、わが民を慰めよ、ねんごろにエルサレムに語り、これに呼ばわれ、その服役の期は終わり、そのとがはすでにゆるされ、その諸々の罪のために二倍の刑罰を主の手から受けた」。(イザヤ 40: 1.2)
その翌日、ヨハネはイエスが自分の方に来られるのを見て言った、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」(ヨハネ 1: 29)
草は枯れ、花はしぼむ。しかし、我々の神の言葉はとこしえに変わる事は無い。(イザヤ 40: 8)
しかし彼は我々のとがのために傷つけられ、我々の不義のために砕かれたのだ。彼は自ら懲らしめを受けて、我々に平安を与え、その打たれた傷によって、われわれは癒されたのだ。(イザヤ 53: 5)
しかし感謝すべきことには、神が私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を賜ったのである。
(第一コリント 15: 57)

お元気でお過ごしでしょうか。今月は「灯芯を消さず」と題して、聖書が語るメシア(救世主)について、特に旧約聖書イザヤ書からお話をしたいと思います。人類の真の慰めの書は「聖書」です。

今カルト宗教の問題が話題になっておりますが、多くの経典は聖書を歪曲し、勝手に解釈しあるいは変更して作られたものです。それは真理には似て非なるものです。

聖書の中心はイエス・キリストです。旧約聖書は１つの民族イスラエルについて記しています。新約聖書は１人の人イエス・キリストについて記しています。その民族は、この世界に「その人イエス・キリスト」が来るために神が始め、育てられたのです。

今世界は、「ある１人の人」によって混乱がもたらされ、戦争が起こされ、私たちの生活にまで悪影響が拡大しています。権力を持った１人の人がいかに世界を毒するかという現実を見せられています。しかし「ある人」によって闇の世界に光がもたらされました。それがクリスマスの喜びです。

８年ほど前、私が日本の将来と私自身の仕事について大変不安を抱いて眠れない夜を過ごしていた時、「傷ついた葦を折ることなく、ほの暗い灯芯を消す事は無い」という言葉が心に去来しました。その言葉を急いで調べたのです。それが旧約聖書イザヤ書 42 章でした。確かに弱る時がある、傷つく時がある、倒れかかる時がある、希望を失いかける時がある。しかし聖書の語るメシアは、決して倒すことなく、消すことがないのだという慰めの言葉をいただきました。以来与えられた任務を淡々と果たしながら不安を抱く事はありませんでした。このメシアこそイエス・キリストです。1741 年 8 月 22 日に作曲を始めたヘンデルは「オラトリオ・メサイア」を完成しました。この曲は旧約聖書に預言されたメシアが、新約聖書のイエス・キリストであることを立証するために書かれたのです。人生のどん底を経験していた大作曲家ヘンデルは、この１曲を生み出したことによって単に英国ばかりではなく、全世界に希望の光を投じることとなりました。そこで私は今年もヘンデル作曲「メサイア」を演奏しているのです。その慰めが皆様の上にありますようにお祈りいたします。

小田 彰

(お知らせ)

＊引き続きウクライナ支援募金にご協力ください。これまでのご支援を心から感謝いたします。小さな祈りを積み上げていきましょう。

＊11 月 26 日ウクライナ支援「メサイア 2022」のためにお祈り下さい。会場にてお待ち申し上げております。

「なぜ今メサイアか」

小田　彰

G.F.Handel

2008年10月10日。ニューヨークでの奉仕を終えて成田空港に戻ってきました。その旅行は急な血圧の上昇によって大変苦しい数日でした。ニューヨークに向かう飛行機の中では、血圧の上昇のために眠ることもできませんでした。そのため帰国便は安いチケットを捨てて、全日空のビジネスクラスを購入しました。横になって13時間眠るためでした。 当時、私は伝道者としてこれからどのように働きを展開したら良いかと思案している時でした。
キリスト教界全体が伝道に行き詰まっている重苦しい感じを拭うことができなかったからです。

しかし実際ビジネスクラスの広い座席に横になっても少しも眠ることができないのです。ますます頭が冴えてしまい、一種の思い煩いの雲が私の心を覆っていました。「神様。私がなすべきことをしていないことがあるでしょうか。またなすべきでないことをしていることがあるでしょうか。」と祈っていました。

ふと私の恩師中田羽後先生の言葉を思い出しました。「大変だけど、メサイアは続けてくれよ。」 1974年7月に私の壮行会の席で心筋梗塞で亡くなった恩師の言葉でした。その後私は留学し、ロンドンで牧師となり、4年後に帰国し、横浜清水ヶ丘教会の協力牧師となりました。以来30年間、中田先生の聖歌を歌わせていただき、広く伝道させていただきました。

しかし14年前のニューヨークからの帰り便の中で、改めて先生が語られたメサイアの意味を考えさせられました。
①旧約聖書の約束のメシアが、十字架に掛かられ、復活されたイエス・キリストであることを歌い上げていること。
②その歌詞のすべては聖書の言葉からとられていること。
③ 280年前作曲された時から、様々な障害や批判の中にありながら、「メサイア」は今日まで歌い続けられてきた奇蹟のオラトリオであること。
④クリスチャンではないアマチュア合唱団の人たちが好んで参加し、また聴衆もメサイア公演には足を運んでくださること。
⑤解説付きメサイアが実現するならば、それは即伝道メッセージになること。
⑥メサイアはクラシック音楽愛好家のためではなく、まれに見る福音を伝える武器であること。
⑦何にもまして、その演奏には神の光に彩られた感動があること。

私が24歳の時、合唱団の指揮者病気のため、千葉県文化会館でピンチヒッターでメサイアを指揮してから50年間、メサイア演奏の素晴らしさは色あせる事はありませんでした。

神様からのご命令であると感じ、2008年以来14年間にわたりメサイア公演を続けることができましたのは、多くの先生方の指導や、兄弟姉妹の応援と祈りと献金のおかげであると感謝しています。

1741年8月22日、大作曲家ヘンデルが人生のどん底を経験していた中で作曲を開始したメサイアが、彼の人生を作り変えたばかりではなく、今日も私たち日本人の人生をも作り変えることができる素晴らしい音楽であることを思い、皆様にもお祈りをいただきたいと願っているものです。

「MAJORA　CANMUS　いざ大いなることを歌おう。
確かに偉大なのはこの信心の奥義である。キリストは肉において現れ、霊において義とせられ、み使いたちに見られ、諸国民の間に伝えられ、世界の中で信じられ、栄光のうちに天に上げられた。キリストのうちには、知恵と知識との宝が、一切隠されている。」（第一テモテ3：16、コロサイ2：3）
1742年4月13日、ダブリン初演においてヘンデルがプログラム序文に書いた言葉。